

日本中国友好協会『日中友好新聞』2024年1月15日

中国残留日本人・中国帰国者の人生が問いかけること

第2回 「満洲国」と日本人移民

残留日本人が生み出された原因を知るには、1930年代の日本政府による中国侵略の歴史にさかのぼらねばなりません。

1932年、日本政府は中国東北地方に傀儡国家「満洲国」を建国しました。また1936年以降、七大重要国策の一環として「満洲農業移民百万戸計画」を推進しました。

政府はこの移民事業を大々的に宣伝し、各都道府県に事実上の応募人数を割り当て、敗戦までに約32万人を送り出しました。その入植先は主にソ連との国境付近の農村で、中国人農民から収奪した既耕地を多く含んでいました。

1945年8月8日、ソ連が日本に宣戦布告し、翌9日午前0時をもって中国東北地方（「満洲国」）に侵攻しました。日本の政府・軍は、ソ連が8月に侵攻することを事前に正確に予測していました。また現地の日本軍（「関東軍」）は、すでにソ「満」国境の防衛を断念し、主力を後退させていました。

しかし日本の政府・軍は、こうした情報を現地の日本人移民に隠蔽し、事前避難もさせませんでした。日本人移民は、ソ連軍侵攻の最前線にまったく無防備で置き去りにされたのです。

そして日本人移民は、凄惨な逃避行を余儀なくされました。青壮年の男性はすでに徴兵され、残されていたのは女性・子ども・高齢者・傷病者です。ソ連軍は、非戦闘員である日本人移民に容赦なく爆撃・銃撃を加えました。また多くの日本人女性を拉致・強姦の上、殺害しました。

逃避行とあてどない流浪は数カ月間にも及び、餓死・病死・凍死・自殺者が続出しました。「足手まとい」になる乳幼児や高齢者は路上や山中に置き去りにされ、または肉親の手によって殺されました。

日本軍は、ソ連軍の侵攻直後に「満洲」領域の放棄を決定し、民間人を放置したまま撤退・逃亡しました。

ソ連軍侵攻後、「満洲」で死んだ日本人は約23万人ともいわれ、広島原爆・沖縄の地上戦・東京大空襲による死者数を大きく上回ります。

中国残留日本人は、このような凄惨な逃避行・流浪の途上で中国人民衆に引き取られ、奇跡的に命をつないだ日本人の女性・子どもたちです。